

美味しいごはん



私の娘はとにかくごはんをよく食べる。歯がはえると、「てびち」という豚足を煮た大人でもてこずるような沖縄の郷土料理を食べていたし、三歳くらいになって外食するようになる大人なみに一人分の料理を食べていた。

週に一度、目に入れても痛くない孫娘のためにタッパーにごはんを詰めてうちまで来てくれる私の母はいつも、「風花のわがままぶりにはうんざりするけど、ごはんを食べているのをみていたら、もうなんでもいいわって許せちゃう」と言って、娘が食べているのをみて笑っている。

娘が赤ちゃんのころ大好きだった本は、ホスピスで過ごしているひとたちが病院にリクエストしてつくってもらうごちそうの写真とそのエピソードを綴った、青山ゆみこさんの『人生最後のご馳走』という本だった。

家のなかにいるはずなのに、ずいぶん静かだなあと思って娘を探すと、娘は部屋の片隅でその本を開いてじっと眺めていた。開いているのは、天ぶらがたくさん盛り付けられているページだったり、お芋を甘辛く煮たページだったりで、どうやら娘はよだれまみれになりながら、長い時間ひとりでその本を読んでいるようだった。

ひょいと娘を抱き上げながら、食えることが好きな子でよかったとつくづく思う。そして、娘にごはんのつくり方を教える日が来ることを楽しみに待つ。自分のためにごはんをつくることができるようになれば、どんなに悲しいことがあったときでも、なんとかそれを乗り越えられる。

*

私には食べものをうまく食べられなかった時期がある。二七歳のとき、たぶんもう離婚しかないと思いつながら、離婚の話を進められずにいたときだ。別れがもうすぐ来るといふことがたしかにわかる、何をしていてもどこからエンディングの「蛍の光」の音楽が聞こえるような日々だった。これはたぶん、修正してやっていくのが難

しいパターンだどこかで何かをあきらめながら日々を過ごし、夫が仕事で地方に赴任することが決まったとき、私はひとりで東京に残ることにこだわった。

離れて暮らして三カ月たったころのクリスマスの翌日、東京にやってきた夫とゆっくり過ごし、夜になってからこれまでのことをきちんと聞いた。長く恋人がいたこと、その恋人は近所に住んでいる私の友だちであること、ひと月前に別れたこと、いまはもう、私の友だちに新しい恋人もできたということ。

長い時間をかけて話を聞いて、「で、これを聞いてどうしろと？」と聞くと、「もうウソはつきたくないと思った。それに陽子はなんでも、知らないよりは知ったほうが理解できるっていうから」と夫は言った。

たしかにそれはそのころの私の口癖だった。

「うーん、でも、さすがにこれは、墓場まで持って行ってほしかったなあ」と言うのと、「ごめんなさい。でも言わないでは生きていけないと思った。償うためにどんなことでもする」と言われた。それで私は、「しばらくひとりになって考えたいから、朝になつたら家を出て行って」とお願いして、夫には単身赴任先の自分の家に帰ってもらった。

翌日の夜になってから、近所に住んでいる別の友だちの真弓の家に電話をかけて、それからすぐに会いに行った。

真弓は、私の友だちで夫の元恋人の親友でもある。私たちは三人やら四人やら、あるいはもっとたくさんのひとたちと、何度も一緒にごはんを食べてきた。

「彼に恋人がいた。○○とつきあっていたんだって。ひと月近く前に別れたんだって。四年間つきあっていたんだって。私に話さないと生きていけないって思って話したんだって。私にだったら理解できるみたいなことを言われたけれど、どれだけ考えても意味がわからない。ふたりはどんなことを思いながら私のそばにいたのかな」

真弓はぶるぶる震えていた。そしてきっぱり、「離婚やな」と言った。

「陽子、ふたりのこと許さないでいいよ。っていうか、許そうとしたらいかんよ。あんたが壊れるよ」と言ってから声を振り絞るようにして、「あのな、陽子、死んだらあかんよ」と言った。

私はびっくりした。死ぬ気持ちはちっともなかったからだ。

そしたら真弓は、「自殺したらな、真弓も普通ではいれんよ。あんたの周りのひと、みんなが傷つくよ。あのな、陽子のお母さん、陽子の親戚、みんな一人残らず傷ついて、三代先まで祟るよ」と言った。

真弓の言っていることはよくわからない、と思ったけれど、まっすぐな目であんまり真剣な顔をして話すから、「私は死なないよ。でも、覚えておく」と約束した。

真弓がいれてくれたお茶を飲みほして、「じゃあ、そろそろ帰る」とコートを着て靴を履いて玄関先で手を振ると、真弓は泣いていた。じっと私を見て、「忘れちゃいけないよ。死んだらあかん」ともう一度言った。

ひとけ
人気がない家に帰りたくなくて、うんと遠回りして家に帰った。

寒い師走の夜の道で、へえ、こんなことってあるんだとどこかで少し面白いがる。

人生はいろいろあるというのは本当なんだな。結婚してめでたしめでたし、はいおわりではないのだな。次、私は何をしないといけないのだろう。とりあえず、私は彼女と話をしないといけない。

翌日になって彼女に電話をかけると、怒った声で「あたしは何も話したくない」ときっぱり言われた。え、そこで怒るんだと思いつつながら、私のほうが下手したてになって説得する。

「だって、ほら、三人の関係があるでしょう？ それに私とは私との関係があるでしょう？ だから、〇〇は私にこのことを説明しないとイケないでしょう？」

電話の向こうからうめくような声がした。

「わかった。でも、あたしも覚悟がいる。もう一日、待ってほしい」

被害者みたいな顔をするのはやめて。地獄の底に居るのはあなたみたい。

いろいろ言いたかったけど、私はごはんを食べることも眠ることもできないまま、約束の時間になると部屋着のうえにコートを羽織り、何度も訪れた近所にある彼女の

家に向かった。

彼女は紅茶をいれるのがとてもうまい。こんな日なのに、やっぱりいい香りの紅茶をいれてくれる。きれいな青と黄色の丸いボウルに入ったイチゴを出してきて、体育座りをしている私の前にテーブルを隔てて正座した。

へえ、イチゴを買う余裕があったんだ、でも私はイチゴなんか食べないよと思いなから、イチゴの入ったボウルをじっとみる。

「とりあえず、四年間のことを彼の口からぜんぶ聞いたから、今度は〇〇が私にちゃんと説明して」

そしたら、「もともとは遊びだった。そこからはまった」と言われた。それから、なんやかんやこれまでのふたりが付き合い続けた理由を説明された。

でも、私が聞きたいのはそういうことではなく、私のつくったごはんのことだった。なぜ私のつくったものを食べに来ていたのか、何を思いながらごはんを食べていたの

か。日常生活に侵食して、ひとの善意を引き出すのはどういう気持ちなのか。

「なんで私のつくったごはんを食べたの？　なんで京都に帰るっていうときに、私に植物の面倒をみるように頼んだの？　なんで隣の家に住み続けていたの？」

私の質問に彼女はなにひとつ答えなかった。そして、「離婚するのをずっと待ってた。でも一度も離婚するって言われたことはなかった」と言うと、今度は顔を覆ってさめざめと泣き出した。

泣いているひとは話ができないから、泣き止むのを黙って待つ。泣いている彼女はとてはかなげで美しくて、なんだか京都の女って本当にタチ悪いなあと思いがら、それにしても四年間、うちの家のふたつ隣の家で離婚を待ち続けていたっていうのは、なかなかの辛抱強さだなあとふと思う。いつまでも離婚しない恋人の住む家の灯りがともる玄関先を通り過ぎて、誰もいない自分の家に帰るのはどんな日々だったのだろう。

「毎日、うちの家の前を通過って、うちの灯りをみながらひとりで自分の家に帰るの、つらかったんじゃない？」

ふっと口をついて出てきた言葉を声にすると、彼女は今度こそ本気で泣き出した。私は捨て身で泣いている女のひとに本当に弱く、そういう女のひとのやり口に勝てたことがほとんどない。ちょっとだけ本当にかわいそうになって、「もう、いや。仕方がなかったってことなのね。わかった」と言った。

「陽子、ほんまにごめん。今日、包丁で刺されるって思ってたん」

へえと思ひ、また頭の芯が冴え冴えとする。包丁で刺されるくらいで許されることなのかな、これ？

あのね、〇〇。刺してなんかやらないよ。四年間、何も気づかず、あなたに優しくしていた自分のことを刺してやりたいの。でも、私がそれをやると真弓は壊れて、私

の家族は三代先まで何かに崇られることになるらしい。だから私は何もやらずにここを去って、でもあなたが私にやったことはひとつ残らず覚えておく。

本当に言いたかったことはそういうことだ。それでも何も言わずに家に帰る。

*

本当に苦しかったのはそのあとだ。夫に恋人がいた、それが私の友だちだった。いまはもうふたりは別れていて、彼女には新しい恋人ができたらしい。つまり、私にいま残されたのは、夫のことを許すか許さないかの選択しかない。

咀嚼^{そしゃく}して咀嚼して、これはもう私には受け入れることができないとわかったとき、

私の前に現れたのは、まったく音がなくて、ごはんが食べられないという時間だった。何をしていても痛みがあり、どんな言葉もどんな音楽もどんな食べものも意味がない。

そのころ大阪で仕事をしていた友だちの玲子に、「眠れないし、ごはんが食べられない」と電話をかけると、「とにかく週末に東京に行く」と言われた。

「うーん、でも、玲子が帰ってしまったって、ひとりになったときにどうなるかわからな

いから、こっちにこないで」と言ったら、電話の向こうで友だちは泣いていた。

「いつでも東京に行くから忘れないで。ここに来てもいいんだし、それが嫌ならとりあえず沖繩に帰るのもいいと思う」

シカゴで仕事をしている友だちの和美には、何があったのかざっと書き記したメールを送った。そしたらある日、玄関をあげるとそこにいた。

「韓国で仕事があったからついでに帰国した」と和美は言う、イギリスで習ったというイタリア料理をつくって私を椅子に座らせて、ぼつりぼつりとしか話せない私の話を一晩中聞いて、翌日になると新宿まで送れと私を連れ出して東京のお土産をたくさん買って、そのお土産をいくつも私に渡して「ハグハグ、キスキス」と言いながら新宿の雑踏のなかで私のことを抱きしめた。

「あのね、東京が嫌ならシカゴにおいで。部屋はあるからいつまでいてもいいし、一緒に美味しいものを食べ歩こう。だからとにかく何かを食べて」

帰りの電車で、少しだけ明るい気持ちがよく見える。友だちが来てくれたおかげで、高校生のときのような気分になった。失恋して、泣いて、甘いものを食べて、また泣いて、ずっと眠れずにまた泣いて、それでも友だちに何時間でも話を聞いてもらって、きつとこの先もいいことがあるとおぼろげながら思えるような。あのときの失恋とこれはちがう。でも、友だちが来てくれたから、未来にはまだ何かがあるような、キラキラした明るいものがどこかにまぎれこんでいるような気分になる。

仕事があるから帰ってきたというのはたぶん嘘だ。昔から思い立ったらどこにでも出かけていくひとだったから、飛行機に飛び乗り、東京まで来てくれた。いまならわかる。知らん顔して助けだそうとしてくれたことが。それでもあのときは、ありがたいけれど十分じゃなく、ひとりになると苦しくて、毎晩へとへとになって明るくなる空を迎えた。

ああそうだ。流れている水が見たくて、何度も多摩川まで歩いたはずだ。帰り道にあるペットショップに立ち寄って、水槽のなかで泳ぐ金魚をずっと見ていた。泳ぐ魚はなんてきれい。

*

そんなふうに暮らしていると、ある晩、真弓から電話が来た。

「あのな、陽子。いま、真弓のおうちでは粕汁かすじが煮えつつある。いま、鍋がぐつぐつ
いって、あったかく煮えている。陽子、真弓のところよこない？ 真弓の家で食べた
いならそれでいいし、いま、だれともごはんを食べたくないなら、持たせてあげる」

かすれる声で、「一緒にごはんは食べたくない」と言ったら、「うん。無理はしない
でいいよ。取りにくる？ 届ける？」と聞かれて、「外の風にあたりたいから取りに
行く」と言うと、「タッパー、大きいの持っておいで。真弓はずっと待ってるで」と
言われた。

真弓のおうちは本当に近くて数分もかからない。のろのろ支度して、言われたとお
り大きなタッパーを両手に抱いてでかけた。真弓は、「おうちにはいり」となかにい
れてくれて、「ちょっと待っててね」と言いながら、鍋から粕汁をたっぷりわけてく

れた。それから、「真弓のつくった粕汁は無敵やから、きっと元気がでてくる」と言った。

そうこうしていると、真弓の夫が帰ってきた。真弓の夫は音楽のプロデューサーをされていて、デビューさせる新人を探すためにあちらこちらに出かけている。たしかその日は、評判の良いバンドをみるために新潟まで行って帰ってきたとのことだった。

キッチンに突っ立ったまま、「ぜんぜん音が入ってこないんだけど」と、まるでいまの私のひどい状態は、音楽が不毛なせいだというような口調で真弓の夫に文句を言った。真弓の夫がにこにこ笑いながら聞いてくれたので、本当にこのひとはいい人だなあと思いつつながら、前から気になっていたことを尋ねてみる。

「一線越えのすごい音楽がいくつかあれば、あとはもう何もいらぬように思うけれど、そうではない？　〇〇さんの仕事は新人を発掘する仕事だけど、それってせいぜい七〇点くらいの音楽じゃない？　そういうのを探すのはどうするの？」

「よいバンドは、居ずまいがきれいだよ。真剣さが違うというか。舞台に出てくる前

に、そのバンドがどういう音を鳴らすのかは、実はほとんどわかってしまう」

プロの言うことはよくわからないと思ったけれど、大事そうなことを話されたので、「へー、そうか。覚えておく」と言って、私は真弓が用意してくれた温かいタッパーを抱えて家に帰る。

なるほど、どうやら私はしゃんとしておいたほうがいいらしい。どっちにしても苦しいのだから、よい音を鳴らせるようにしないといけないらしい。とりあえず今夜は、真弓が持たせてくれたこの粕汁は、ぜんぶ食べようと心に決めた。

家に帰ってから、キッチンの椅子にどっかり座ってごはんを食べた。あんまり美味しくて、泣きながら食べた。こんなに悲しいのに美味しいということは、私はたぶん、強いのだろう。

「離婚やな」友だちの言葉を反芻する。はんすうああそうだ、離婚やな。これを食べたら、なんとかひとりで生きていく。

それから私と夫は、とりあえず、一年後には離婚しようと約束した。一緒にやって

いくのはもう無理だつてわかったけれど、何もかもなくすのはいまでできない。だから一年間、私を全面的にサポートしてほしいとお願いしたら、本当に助けてくれた。惜しみなくお金を援助してくれて、データの設計の仕方や論文の書き方を教えてくれて、眠れないときには真夜中の電話につきあってくれた。離婚の準備のために、ギデンズの『親密性の変容』をふたりで読み直したりしたのは、いま考えたとそれなりに面白かった。

それでも私はすっきり元気になったわけじゃない。ごはんを食べるのがむずかしかったし、仕事ができずにたくさんひとに迷惑をかけたし、地球が爆発したらいいと言つてよく泣いたし、地球が爆発しないと行ってよく泣いた。

離婚したのはきつちり一年後だ。ずっと前に離婚届は渡しておいたから、今朝、提出してきたという電話をもらつて、ふたりでゆっくり話をした。

「ああ、残念だなあ。あの絶品のペペロンチーノを食べられなくなるのは本当に残念」と言うと、「食べたくなったら、いつでもつくりに行ってあげるよ」と言われて、「そうもいかないでしょう。ああ、面倒くさい。きょうだいだったら本当に楽なのに」と笑つて、電話を切つてやっぱ泣いた。

いろいろありがとう。一緒にいたから、たくさん新しい景色を見ることができた。本当に楽しかった。さようなら。

*

離婚して一〇年近くたってから、私が長いつきあいの親友みたいな男のひとと結婚することを決めたとき、東京に住んでいる真弓に報告に行った。

「もう一度、ひとと暮らしてみようと思う」

それまでうれしそうに私の話を聞いていた真弓は突然しんと静かになって、「あのな、陽子、ぜんぶ忘れていい」と言った。私がびっくりしていると、「本当に陽子は頑張ったんやなあ。でもな、もう、ぜんぶ忘れていい。あのときあったことをぜんぶ、陽子の代わりに、真弓が一生、覚えておいてあげる」ときっぱり言った。

突然、何か全部許されたような気持ちになり、このままだと声をあげて泣いてしまいかもしれないと焦りながら、「あー、でも、学会とかで一緒だし、えーっと、どこかでたぶん、また会うと思うし」と言うと、「そうか、簡単じゃないんやな」と、

真弓は悲しそうな顔をした。いま真弓に伝えたいことはそういうことではないと思ひ直し、「でも、真弓が忘れていいって言ったのは、忘れない」と伝えると、私の友だちは女神さまのような顔をして、いつものようににっこり笑う。

シカゴに住んでいた和美は、長くつきあった男のひとと別れたときに、ふらりと私の家にやってきた。「長くつきあっていたひとと別れるっていうのは、何もかも根こそぎなくなるような気持ちになるんだね。陽子が離婚したとき、陽子の気持ちを全然わかってあげられなかった。ごめんね」と泣くので、「自分の悲しみに集中して」と言うと、「わからなかったんだよ、ほんとうに。つないでいたものをほどくほうが大変だってことが。こんなところにもつながりがあるの、ここにもって毎日そう思っているんだよ。あのとき、陽子はこういう思いをしていたんだって思ったら、顔をみたくなった」と言うので私も泣いた。

この子はいまもアメリカに住んでいて、二年前にアメリカ育ちの日本人と結婚式をあげた。結婚式は、一六カ国のひとが集まる英語とスペイン語と日本語がまざるにぎやかな式だった。繊細な刺繍のオートクチュールのドレスを着て、光輝くように美しいのに、なぜかファイティングポーズで現れた友だちに大笑いしていると、友だちと

結婚したひとが、「僕の輝くひと、僕の真心、こんなにも優しく、こんなにもタフで世界を飛び回る。僕はずっとあなただけを待っていた」と言ったので、私は人目もはばからずに大声で泣いて、初めて会ったアメリカ育ちの台湾人に抱きしめられた。

大阪で仕事をしていた玲子は、沖繩に戻り、いまは私の家の近くに住んでいる。

「思い立ったら、財布とケータイだけでもってすぐに会いに行けるってやっぱりいいもんだ」と話すけれど、友だちも私も忙しくてゆっくり会うのはいつも難しい。

それでも、困ったことがあったときに一番に知らせると必ず会いにきてくれて、時間があったから、「ねえ、あれ、どうなっている？」と必ず尋ねてくる。そういう言葉のかけ方は、私の荷物をぜったいに半分持つという意味なのはよくわかる。

このまえ知人から、私がある女性をいじめているという噂が流れていると教えてもらって、気になって調べてみた。したらその噂を流していたのは、出血がとまらない、病気になった、車の事故に遭ったと連絡をもらうたびに、たくさんのお金をあげたり貸したりしてあげたその女性本人だった。私は本当に傷ついて、ひどい目にあったと玲子に連絡したらすっ飛んできた。

ひとしきり私の話を聞いていた玲子は、「ずっと優しくしてあげていたのに、本当

にひどいね。あとは、弁護士にまかせて裁判でもなんでもしたらいい。でもね、陽子
のことを知っているひとは、陽子がだれかをいじめるなんて、そんなあほなって思う
はずよ」といった。「そうかなあ、みんな私のこと知っているかなあ」と、私が心も
とない気持ちで言う、「昔から陽子のことを知っているひとは、何の心配もいらな
いよ」と、やわらかい声で笑われた。

ふと思いついて、「玲子はさ、子どもときみたいになにひとつ傷がないような人
生と、優しくしてあげたひとにぼろぼろになるまで騙だまされて、それでも大人になった
人生とどっちがいい？」と聞いてみた。そしたら、なにをあほなことを言っているの
だという顔をされて、「大人になったほうがいいやろ。ぼろぼろでもなんでも。ひと
に優しくできるほうがいいやろ」と即答された。

こういうとき、私の友だちは大阪弁でなにかを語る。そういうふうにしかなえない
言葉があるんだろうなあと思っている。

*

生きていることが面倒くさい日々が私にあったことは、若い女の子の調査の仕事をしていると、どこかで役に立っている。

沖縄で出会った風俗で働いていた女の子は、自分の恋人と自分の友だちが浮気して、それがすべて発覚した夜の話を話していた。その子が、「男の話を聞いてあと、まっすぐ女の家に行ったんです」と言ったとき、「ああ、だって三人の関係があるんだもんね」と私が心から納得してそう言うのと、「そう!」と言って、その子は泣いた。

この子は数年前に亡くなった。止めてあげることがはできなかった。それでも私に同じ体験があつてよかつたと、私はそう思っている。

東京で話を聞かせてもらっていた高校生のときから知っている女の子は、職場でいじめられて鬱状態になっていたときに、友だちに連れられてライブハウスに足を運んだときの話をしていた。

「そういうときって、音があつても入ってこないでしょう?」と私が尋ねると、「あ、ここだ! ってなって、居場所はここだって。すごい癒されて。そのときはわけわからなくて泣いていて」と、彼女は明るい声で話してくれる。

無音のような耳であつても、いつかどこかで新しい音に破られる。私にその日がく

るのかわからない。でもそれは楽しいことだと、インタビュアの帰り道では心が弾む。あれからだいぶ時間がたった。新しい音楽はまだこない。それでもインタビュアの帰り道、女の子たちの声は音楽のようなものだと思はる。だからいまやっぱり私は、新しい音楽を聞いている。

悲しみのようなものはたぶん、生きていくかぎり消えない。それでもだいぶ小さな傷になって私になじみ、私はひとの言葉を聞くことを仕事にした。

*

娘とふたりで過ごしたこの前の休日、娘にごはんのつくり方を教えた。友だちが私につくってくれたような、生きることの決意できるような、あの美味しい粕汁のようなものを教えてあげたいと思いつき、冷蔵庫をあけてみる。

冷蔵庫には何もなくて、まあ、とりあえず料理の事始めはこれでいいのかなあと思っ、うどんに生卵を落としてネギと揚げ玉をかけただけのぶっかけうどんのつくり方を娘に教える。

普段、私も夫もゆっくりごはんをつくるから、あつという間にできたごはんに、「すぐにできた」と娘はびっくりしながら食べはじめ、「カリカリしたのはもうちょっと入れたほうがいい」と言った。もう一度冷蔵庫をあけて揚げ玉をとりだしながら、「納豆もあるよ」と声をかけると、「納豆もいれたい」と娘は言って、自分で納豆を丁寧にかきまぜると、それをうどんののっけて全部ひとりでたいらげた。

風花。今日、お母さんがあなたに教えたものは、誰にも自慢できない、ぐちゃぐちゃした食べものです。それでもそれなりに美味しく、とりあえずあなたを今日一日、生かすことができます、所要時間は三分です。

これからあなたの人生にはたくさんのことが起こります。そのなかのいくつかは、お母さんとお父さんがあなたを守り、それでもそのなかのいくつかは、あなたひとりでしか乗り越えられません。だからそのときに、自分の空腹をみたすもの、今日一日を片手間でも過ごしていけるなものか、そういうものを自分の手でつくることができるとなると、手抜きでもごまかしでもなんでもいいからそれを食べて、つらいことを乗り越えていけたらいいと思います。

そしてもし、あなたの窮地に駆けつけて美味しいごはんをつくってくれる友だちができたなら、あなたの人生は、たぶん、けっこう、どうにかあります。

そしてもうひとつ大事なことです。そういう友だちと一緒に居ながらひとを大事にするやり方を覚えたら、あなたの窮地に駆けつけてくれる友だちは、あなたが生きていくかぎりどんどん増えます。本当です。

ぶっかかうどんのつくり方を教えた日、私が娘に教えてあげたかったのはそういうことだ。

あの子がそういうことをわかる日が、どうかゆっくりきてほしいと私はそう思っている。澄んだ声で歌をうたうあの子の手足がぐんと伸びて、ひとりですっきり立っていられるようになってから、その日がくるように願っている。

ア
リ
エ
ル
の
王
国



明け方三時ごろ、「ママ、おしっこした」と泣き出した娘を立たせて、パジャマを脱がせる。四日前に熱が出たあと、娘は何度もおねしょを繰り返していたから、寝室には新しいパジャマも替えのシーツもすべて用意してある。濡れたパジャマをシーツにのせて、シーツをぐるりと布団から剥ぐ。

着替えを済ませた娘は私のお布団に移ってきて、「まだ夜？ 朝来た？」と尋ねてくる。「まだ真夜中だから眠ってね。かーちゃん、今日は辺野古へのかに行く」と言うと、「風花も一緒に行く」と娘が言う。「今日は、海に土や砂をいれる日だから、みんなとって怒っているし、ケーサツも怖いかもしれない」と言うと、娘はあっさり、「じやあ、保育園に行く」と言う。

暗闇のなかで、娘は私に「海に土をいれたら、魚は死む？ ヤドカリは死む？」と

尋ねてくる。

「そう、みんな死ぬよ。だから今日はケーサツも怖いかもしれない」

娘の髪をなでながら、ついに一二月一四日が来てしまったと目を閉じる。

辺野古に土砂を投入するための船を発着させる予定の港が、台風で壊れたので使えなくなった。そう発表されてホッとしたのもつかのま、今度は突然、民間の港から土砂投入の船をつけて、海に土砂を投入するという報道があった。せめて今週は辺野古に行けるようにしておこうと思っていたのに、ようやくつくりだしていた時間は娘の発熱であっけなくなくなって、そして土砂投入の朝はいつものようにやってくる。

娘が眠らないので、手足をマッサージしながら歌をうたう。娘を寝かしつけるときは、だいたい「あの町この町」「椰子やしの実」「満月の夜に」の歌を繰り返す。

娘がまだ二歳に満たないころ、「あの町この町 日が暮れる」と歌いかけると、娘は「りゅー」と歌い、それから「お家がだんだん 遠くなる」と歌いかけると、娘は「るー」と歌い、そして「今きた この道 かえりゃんせ」と歌いかけると、やっぱり「せー」と歌った。

あるとき、私が口ずさむ歌はどれも遠くに旅立っていった、もう元の場所には戻ってこないという歌だと気がついた。ただたどしい言葉で歌をうたおうとした娘は、あつというまにひとりで歌をうたうようになっていた。だからやっぱり、娘はあつというまに大きくなって、そしていつか私の前からいなくなる。母親になつてから、私は娘がどこか遠くに旅立っていくその日のことを、繰り返し繰り返し考えるようになった。

眠りに落ちてしまいそうな娘が、「お魚やヤドカリやカメはどこに行く？」と、もう一度私に尋ねてくる。眠りにつく前の娘になにか優しいことを言ってあげたくて、「お魚やヤドカリやカメは、どこか遠くに逃げていきました」と言うと、娘は「アリエルみたいに？」と尋ねてくる。

そう、「リトル・マーメイド」のアリエルみたいに。青い海のどこかに、王妃や姫君が住む美しい王国がある。風花もいつか、王国を探して遠くに行くよ。

*

起きると六時になっている。あわてて支度をすませて、七時には仕事に行く夫とごはんを食べる。「行ってくれてありがとう。怪我だけは気をつけてね」と、出発間際に言われて夫を見送る。

なかなか起きない娘を起こして、朝ごはんを食べさせる。食卓の玄米のおにぎりとほうれん草の炒めものをみた娘は、「玄米のおにぎりなんか大嫌い。風花は白いおにぎりがよかった」と言ってさめざめと泣く。

娘の隣に座ってほうれん草を箸でつまんで、「かーちゃんが僕をねらっているよ、僕は風花ちゃんに食べられたい」と、ほうれん草になって声をかける。すぐに娘は泣きやんで、「いいですよ」とせっせとごはんを食べはじめた。

それからふたりで家を出る。

最近、保育園までつづく農道を発見したので、途中で車をとめて、ふたりで保育園まで歩いている。高速道路わきの農道と保育園とがつながっている道の途中には、大根とじゃがいもの畑とパイアの苗を育てる農園がある。畑のわきの雨水をためているドラム缶のなかには、まだ冬なのにオタマジャクシが泳いでいる。

いつものように、娘は「おいしくなーれ」とじゃがいもに魔法をかけて、オタマジ

ヤクシの手足がポンと目の前で出てこないか熱心に観察する。

黙り込むと、ふてくされていているようにみえる膨らんだ娘の頬を眺めながら、「サンタクローズに何を頼もうか？」と尋ねてみる。「白いおにぎりとアリエルのしっぽ。

風花は海で泳ぐよ」と言われて、今度は私が黙り込む。私はたぶん朝をはじめの前に、どこかで一度、泣いておけばよかったのだ。

保育園に娘を預けてからひとりで農道を歩いて車に戻り、辺野古に向かう。

移動しながらいつも思う。富士五湖に土砂が入れられるとえば、吐き気をもよおすようなこの気持ちが変わるのだろうか？ 湘南の海ならどうだろうか？

普天間の危険除去をうたう「最良の決定」の内実は、普天間直下の我が家から車で一時間とかからない、三七キロ先にある辺野古への基地新設である。それが三鷹と東京湾くらの距離でしかないことを知ってもなお、これは沖縄にとって「最良の決定」だとみんなは思うのだろうか？

辺野古の地盤は、マヨネーズのように柔らかい。海底に何十メートルもの杭を打つという、人類が一度も試したこともない工事ができると、みんな本当に思うのだろうか

か？

一〇時に辺野古に到着して、ゲートの前に座りこんでスピーチを聞いていると、キャンプ・シュワブのなかの駐車場に車をとめた警察官に、移動するようにマイクで言われる。沖繩のひとが入れないはずの米軍基地のなかに、警察官や機動隊は車をとめる。かれらは、基地のフェンスの内側からビデオカメラをまわし、座り込んでいる人びとに移動を促し、命令に従わなければ強制的に連れて行く。

それでも今日は、警察官に手足を捕まえられて強制的に移動させられることはないので、やっぱり土砂が投入されるのだとぼんやり思う。空にはヘリコプターが二機飛んでいて、あれは軍機ではなく報道関係のヘリコプターだから、やっぱり土砂が投入されるのだとまた思う。

スピーチを聞きながら座りこんでいると、一一時過ぎに、「たったいま、海へ、土砂の投入があったようです」という放送が響きわたる。私の眼の前で泣きだしたひとたちの顔と、空を旋回するヘリコプターが涙でにじむ。「ひどい」とつぶやいたけれど、本当は声をあげて泣きたいと思う。地上で右往左往している私たちではなく、遠くの空の上から、たったいま赤くにこったであろう海を映しているヘリコプターにも

苛立つ。今日の報道は、青い海に土砂が投げ入れられる映像一色になるのだろう。泣きながら立ち尽くしているひとたちは、よろよろとテント前に移動する。

*

移動してからも、いろいろなひとのスピーチは続く。

戦争が終わったあと野ざらしにされていた遺骨を掘り出して、遺族に返す活動を続けているガマフヤー（壕を掘るひと）の具志堅隆松ぐしけんたかまつさんの話は胸を打つ。

「いま、基地になっているあの場所には、戦後、捕虜をいれる収容所がありました。捕虜になってからも、毎日たくさんひとが亡くなり続けました。四〇〇人の方々はまだあそこ、キャンプ・シユワブのあの土の下に眠っています。新しい基地は、その方々の眠る土の上に、今度はコンクリートをかぶせるというものです。僕はそのひとたちをひとり残らず掘り出して、おうちに帰してあげたいんです」

戦場をさまよって捕虜となって生き延びたと思ったのもつかのま、飢えて死んで、死んだその場に埋められて土のなかで骨になって、それでも家に帰ることができないひとたちがあの土の下に眠っている。そのひとたちの死体の上にキャンプ・シュワブはつくられて、そして今度は新しい基地の建設が進められている。

昼食を準備することなく向かったので、一時半にはゲート前から離れる。

途中でスーパーに立ち寄って、あんこの入った甘いパンと夕食の食材を買って、車のなかでパンを食べる。——こういうときだから、毎日やっていることをちゃんとやらないといけない。金曜日の夜は母たちとごはんを食べる約束をしているから、私がいんなのごはんをつくらないといけない。ごはんの前には書評の原稿も書きはじめて、来週の頭には新聞社に送らないといけない。

三時過ぎに自宅に帰り着き、二時間だけと決めて仕事をする。書評を書きはじめたけれど言葉が浮かばず、本を読みかえしていたら結局五時半になってしまい、訪ねてきた母と母のパートナーと一緒にごはんをつくる。六時には娘と夫が帰宅して、みんなで一緒にごはんを食べる。

夕方のニュースではやっぱり辺野古の海への土砂の投入が報道されていて、ごはん

を食べながら、今日の辺野古の様子を少し話す。

娘はまた、「海に土をいれたら、魚はどうなった？」と聞きはじめ、どんなときにも子どもの問いに正直に答えようとする母も、「どうなったかね、魚たちは」と言いよどむ。夫が静かな声で、「みんな、まだ生きているよ。だから工事を止めないといけないね」と娘に話す。娘が「ケーサツは怖かった？」と私に聞くので、「今日はみんな優しくかったよ。ケーサツのひとつも、今日は静かだったよ」と報告する。

そう、今日の警察官はみな静かだった。いつもは立ち止まるだけで歩くように促され、従わないと背中をぐいぐい押される歩道でも、今日は何もされることはなかった。ゲート前で座り込んで聞く、いつもは静止されるスピーチも、今日は一度もとめられなかった。ちょうどそのころ、沖合のあの青い海に、赤い土が落とされた。

*

母たちが帰宅してお風呂に入り、九時ごろ、娘とふたりで寝室に行く。娘は毎晩、眠る前に、「かわいいかわいい風花ちゃん」のお話をせがむ。

「あるところに、かわいいかわいい風花ちゃんという女の子がいました」とお話のはじまりを告げると、保育園のお姉ちゃんたちに「あっちに行つて」といじわるな言葉を言われたことや、保育園のお迎えが遅くなったときにそばにいてくれた先生のことなど、娘はその日に起こった理不尽な出来事をお話に連れてと私にねだる。

お話の最後に登場するのは王妃になった娘で、王妃は「年下の子に意地悪をしたらいけません」と保育園のお姉ちゃんたちを諭し、「チヨコレートをあげましょう」と、お迎えが来るまでそばにいてくれた先生に褒美をさずける。そうしたお話を私から聞くことで、世界は何も壊れていないと安堵して、娘はそれから眠りに落ちる。

今日もまた白い枕カバーに頬をつけた娘に、「あるところに、かわいいかわいい風花ちゃんという女の子がいました」と話し出すと、「風花は、アリエルね。お魚が友達だちで、海に土をいれる魔女をやっつけるっていう話ね。風花はしっぽがあつて、海を泳ぐのが上手つてお話ね。魚とカメとどこまでも行くつていう長い長いお話ね」と言われる。

ねえ、風花。海のなかの王妃や姫君が、あの海にいる魚やカメを、どこか遠くに連

れ出してくれたらいいのにね。赤くにごったあの海を、もう一度青の王国にしてくれ
たらいいのにね。

でもね、風花。大人たちはみんな知っている。護岸に囲まれたあの海で、魚やサン
ゴはゆっくり死に絶えていくしかないことを。卵を孕はらんだウミガメが、擁壁ようへきに阻はまれ
て砂浜にたどりつけずに海のなかを漂うようになることを。私たちがなんど祈っても、
どこからも王妃や姫君が現れてくれなかったことを。だから私たちはひととおり泣い
たら、手にしているものはほんのわずかだと思ひ知らされるあの海に、何度もひとり
で立たなくてはならないことを。そこには同じような思ひのひとが今日もいて、もし
かしたらそれはやっぱり、地上の王国であるのかもしれないことを。

だから、風花。風花もいつか、王国を探して遠くに行くよ。海に向こう、空の彼方、
風花の王国がどこかにあるよ。光る海から来た輝くあなた、どこかでだれかが王妃の
到着を待っているよ。